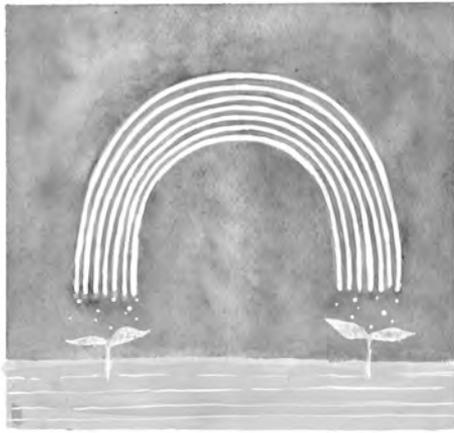


日本人は、なぜ人型ロボットが好きなのか

県教育庁財務課長

中山 均



最近、「ハーバードの日本人論」という本を読んだ。ハーバードは、アメリカ最古の大学で、各分野での指導的な人材を輩出し続けている。その名門大学で、黒澤明や小津安二郎の映画やアニメを教材にしたメディア論、清掃を尊ぶ精神や禅ブームからの宗教史、村上春樹や東野圭吾が世界で愛される理由を紐解く比較文学など、日本に関する多くの講義が人気になっている。

アニメ講義では、鉄腕アトム、ドラえもんのように、日本ではなぜロボットを人型で友達として描くのかなど、日本人とは違った視点で、日本文化を分析議論している。(人型ロボットには、すべてのものに魂が宿るといふ神道の考え方や、明治維新以来の「理想的な社会の実現に不可欠」というテクノロジへの友好的感情などが影響しており、ロボットアニメの描く未来志向性が、世界のIT企業経営者から注目されているそうだ。)

こうした視点は、私の、これまでの数少ない外国の方との交流機会でも、感じたこと

ある。彼らは、日本の家庭に神棚と仏壇があることを不思議に思い、忘れ物が見つかることに感心し、コンビニの品揃えやタクシーの自動開閉ドアに驚く。日本人には、「当たり前」のことが、海外の人から見ると「日本ならでは」であることに気づかされた。

本県においても、グローバル人材の育成に向け、英語教育の充実や海外姉妹校との交流、留学促進などとともに、我が国や郷土の伝統・文化の理解にも力を入れている。ハーバードでの「異文化を学ぶことは、良き地球市民になるための教養として不可欠で、自国の文化、さらには自分自身についての理解が深まる」との教えのとおり、異文化と交わることは、自文化の再認識にも繋がる貴重な経験となる。海外との交流は新型コロナウイルス禍で一時ストップしている。延期となった東京オリンピック・パラリンピックを契機に、国際交流の流れが再び加速し、日本を知り、強みとして世界に発信する若者が多く生まれることを期待している。